様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：８２６７４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１６０４

研究課題名（和文）貧困と社会的孤立状態にある単身男性高齢者からの援助要請を促すための支援方法の検討

研究課題名（英文）Examination of support methods to encourage help-seeking from single older men in poverty and social isolation

研究代表者
村山　陽（Murayama, Yoh）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：９０７２７３５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：貧困や社会的孤立状態にある単身男性高齢者が、近隣や自治体からの支援を受けること(援助要請)を阻害する要因・促進する要因を把握した上で、援助要請を促すための支援方法について提案することを目的とした。結果として、孤立している単身男性は深刻な生活問題に直面しながらも、その問題に対する認識が希薄であり、解決に向けて他者に相談したり援助を求めることに消極的な傾向が認められていた。さらに、単身男性には経済状況が苦しいほど他者への不信とともに将来への諦めが強まり、援助を求める気持ちが抑制される傾向が明らかになった。以上の知見をもとに、学際的な観点から単身男性高齢者の援助要請を促す支援策が提案された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
単身高齢者の生活困窮者支援を行っている施設や団体との協同により、孤立や貧困状態にある単身男性高齢者を対象に調査を行ったことで、単身男性高齢者どのようなライフコースを経て貧困や孤立状態に陥り、それにどのように対処したのか明らかにした。さらに、地域在住の単身高齢者を対象に質問紙調査を行い、援助要請の促進要因と阻害要因を見出し、それをもとに単身男性高齢者の援助要請を促すための具体的な支援方法について提案することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify support methods for encouraging help-seeking from single older men in poverty or social isolation. As a result, single older men who had experienced hardships such as isolation or poverty during middle or older adulthood were not thinking about the future despite facing severe difficulties in everyday life. Furthermore, it was shown that poor economic status was associated with high resignation to the future which was particularly higher among men with a poorer current economic status, which suppressed help-seeking. These findings suggest that it is important that single older men need to be encouraged to begin planning for their future at an earlier stage, before older adulthood. Based on the above findings, support measures have been proposed to encourage help-seeking from single older men in poverty and social isolation from an interdisciplinary perspective.

研究分野：社会心理学

キーワード：単身男性高齢者　援助要請　貧困　社会的孤立

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

急速な高齢化の進展を背景にして、高齢者単身世帯および高齢夫婦世帯は年々増加している。とりわけ男性未婚者の増加は顕著であり、男性の単身高齢者の増加が認められている。これまでの研究では、単身男性高齢者では、女性に比べて孤立・孤独に陥るリスクが高いことが示されており、単身男性高齢者の社会的孤立予防に向けたアプローチが求められている。一方で、日本の男性高齢者の社会参加型プログラムへの参加率は依然として低いことが示されており、本来ターゲットとしている貧困や社会的孤立状態にある単身男性高齢者にサポートが行き届いていない現状が示されている。男性高齢者のプログラムへの利用率が低い背景には、男性高齢者の定年退職後の人間関係の乏しさやジェンダー規範(男らしさ)があることが指摘されている。こうした事態に際し、単身男性高齢者側の立場から、サポートを受けることに対する意識・態度を把握し、その阻害要因と促進要因を明らかにすることが必要不可欠である。

２．研究の目的

貧困や社会的孤立状態にある単身男性高齢者が、近隣や自治体等からの支援を受けることに対してどのような意識・態度を持っているのかを明らかにし、さらに支援を受けること(援助要請)を阻害する要因・促進する要因を把握した上で、援助要請を促すための具体的な支援方法について提案することを目的とした。

３．研究の方法

研究 1. 貧困・社会的孤立状態にある(あった)単身男性高齢者を対象にした面接調査

(1) 方法：①環境上・経済的理由のため市区町村長の措置により都内の A 養護老人ホームに入所している男性高齢者 80 人余り(単身・生活困窮経験者)を対象にしたインタビュー調査、②地域在住の単身高齢者 30 人余りを対象にしたインタビュー調査、をそれぞれ実施した(2019 年 5 月～12 月)。

(2) 調査項目：①家族・親戚との関係、②職業経験、③子どもの頃から今までに経験した困難・困り事と対処過程、④他者から助けてもらうことについての考え方、等についてたずねた。1 回のインタビュー時間は 50 分程であり、研究協力に同意を得られた上で IC レコーダーにより録音し、それを逐語記録として書き起こしたものをデータとして使用した。

(3) 分析：ライフコースを通じた孤立や生活困窮に至るパターンを明らかにするために時間経過に伴う行動や思考の変容を環境要因とともに可視化して捉えることを特徴とする Trajectory Equifinality Model(TEM)を用いた。

研究 2. 地域在住の単身高齢者を対象にした質問紙調査

(1) 方法：貧困・社会的孤立状態にある単身高齢者が援助要請をするに至る理論モデルを構築するために、①2020 年 3 月にインターネット調査会社に登録している 50 歳から 79 歳までのモニター1200 人を対象者としたオンライン・アンケート調査(予備調査)を行った上で、②2020 年 12 月に東京都 A 区の 50 代～70 代の区民 991,567 人(2020 年 8 月現在)の中から無作為抽出した台帳上の単身者 4,000 人を対象に郵送調査を実施した(回収率 1,829 票:45.7%)。

(2)調査項目： ①将来展望意識尺度、②General Help-Seeking Questionnaire(GHSQ)、③Barriers to Help Seeking 項目等、④経済状況 (現在、子どもの頃)等についてたずねた。

(3)分析：各測定変数の関連を検討するため年齢を統制し男女別に偏相関係数を算出した上で、男性と女性に分けた多母集団同時分析を行った。

研究 3. 相談援助業務に従事する職員への調査

(1) 方法：①都内の自立相談支援機関 55 カ所(島嶼部は除く)に質問紙調査の依頼を行い、本調査の協力に応じた 1 都 6 県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、群馬県、栃木県、茨城県)294 ヵ所の事業所に調査票を 2 部(2 人分:合計 588 人分)郵送し、最終的に 388 人(回収率 60%)より回答を得た。②質問紙調査の調査協力者の中からインタビュー調査の協力に応じた 7 事業所 13 人に半構造化インタビュー調査を実施した。

(2) 調査項目：①生活課題を抱えた単身中高年男性の問題認識、単身中高年男性にサービス利用を促す難しさ、②単身中高年男性への支援における困難について、③単身中高年男性の援助要請促す工夫、等についてたずねた。

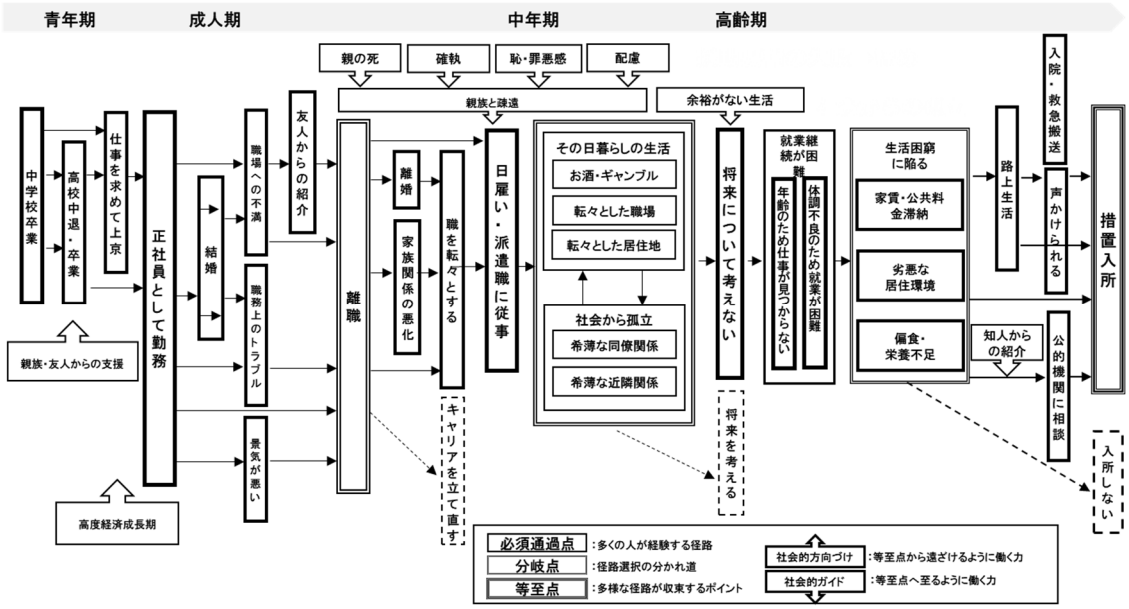
４．研究成果

研究 1. 貧困・社会的孤立状態にある(あった)単身男性高齢者を対象にした面接調査

都内の養護老人ホームに措置入所した男性高齢者 83 名を対象にインタビュー調査を行った(Murayama et al,2021)。その内、入所前に単身であった 29 名(生活困窮経験者)を分析対象者とした（平均年齢 79.7 歳）。分析の結果、生活困窮に陥るパターンとして①生涯型：幼少期の困窮した生活が高齢期の生活困窮に至るまで一貫して続くパターン、②離職型：正規雇用を離職した

後に不安定な就労状況の中で生活困窮に陥るパターン、③退職型：退職後の孤独状態で飲酒・ギャンブル等から生活困窮に陥るパターン、がそれぞれ認められた(図表 1)。いずれのタイプも深刻な生活問題・社会的孤立に直面しながらも、当時は将来を展望することがなく他者に相談したり、援助を要請する行動には至っていなかった現状が示された。

図表 1. 離職型のパターン図



参考文献：

• Yoh Murayama et al (2021). How Single Older Men Reach Poverty and its Relationship with Help-seeking Preferences , *Japanese Psychological Research*, **63**(4), 229-480.

・村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香「生活困窮状態にある単身男性高齢者における被援助志向性の特徴」 日本心理学会第 84 回大会， 2020.【特別優秀発表賞】

研究 2. 地域在住の単身高齢者を対象にした質問紙調査

① 予備調査：研究 1 で示された「深刻な生活問題に直面しながらも将来を考えていなかった」状態に関する記述から、将来展望意識を測定する項目(将来展望尺度)を作成した(村山他, 2021)。将来展望尺度の因子構造を明らかにするため探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。次いで、それにより得られた因子構造について、その因子不変性を検討するために 4 群別(単身男性,単身女性,同居男性,同居女性)に多母集団確証的因子分析を行った。最終的に、将来展望意識尺度 7 項目 (下位次元：将来諦め・将来不安)を作成した(図表 2)。

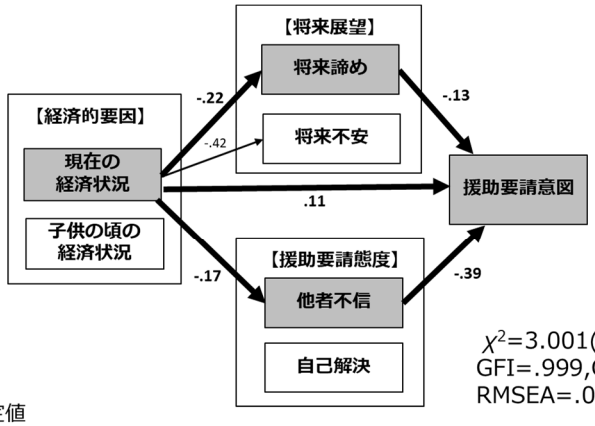
図表 2. 将来展望意識：因子分析結果

測定項目	将来諦め・放棄	将来不安
自分の将来に関心がない	**.73**	-.07
自分の将来は成り行きに任せている	**.65**	-.02
自分の人生はどうなっても構わない	**.65**	.11
将来のことを考えるのは面倒だ	**.61**	.28
人生は何とかなるものだ	**.55**	-.28
将来のことを考えると憂うつになる	-.02	**.97**
将来の生活を考えると不安になる	-.07	**.74**

参考文献：村山陽ほか(2021). 単身男性中高年者における将来展望を抑制する意識の検討, 老年社会科学, 43(1) 26-35.

② 本調査：本研究における主要な調査項目に欠損値があった者を除いて 1274 人(男性 658 人,女性 616 人)を分析対象者とした。男女別の多母集団同時分析を行った結果、男性では経済状況が苦しいほど他者への不信とともに将来への諦めが強まり、援助を求める気持ちが抑制されることが明らかになった。女性では他者への不信の強まりに加え、自分で解決しようとする意識の強まりも援助要請を消極的にする要因になっていた。また、子ども時代の経済状況の苦しさもそんな意識の強さに関連していた(図表 3)。これらの結果から、経済的困難を抱える単身中高年者が援助を求めやすい環境をつくるため自治体など支援する側が信頼関係の構築に取り組むことが重要であり、そして男性には「他者と関わる中で将来への展望を持てるようにする支援」、女性には「人に頼る部分と自分で解決する部分の整理を促す支援」が求められることが示唆された(村山他, 2021b)。

図表 3. 単身中高年男性のパス図



χ^2=3.001(2), p=.223,
GFI=.999,CFI=.999, AGFI=.979,
RMSEA=.020, AIC=143.001

注1) 値は全て標準化推定値

注2) 年齢、誤差項、共分散は省略し5%水準で有意なパスのみ表示

参考文献：村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，山口淳，小林江里香「経済的困難を抱える単身中高年男性の援助要請はどのように抑制されるのか：将来展望意識に着目して」 日本心理学会第 85 回大会， 2021.**【特別優秀発表賞】**

研究 3. 相談援助業務に従事する職員への調査

自由記述およびインタビュー調査から得られた質的データについて、定性的コーディングを参考に分析を行った。分析の結果、相談員の多くが単身中高年男性の支援状況について難しさや困難さを感じており、その要因として支援・サービス利用に拒否的・消極的であったり自分の考えに固執するといった相談者側の態度が多く挙げられた。これは、研究 1 および研究 2 の知見と一致するものであり、相談員側の観点からも単身中高年男性の特徴として、問題の把握や援助要請を促すことが難しいと感じていることが認められた。一方、各事業所では単身中高年男性の相談援助を促す試みとして、支援の可視化やモデルの提示等の「問題を客観的に認識することを促す」支援方法が行われていた。今後、単身中高年男性の居場所づくりや相談のきっかけづくりなど援助を要請しやすい環境づくりを進めるとともに、支援方法を理論に基づいて体系化する必要性が明らかにされた。

援助要請を促すための具体的な支援方法の検討

本研究で得られた知見をもとに、多領域の専門家や実践家、有識者 30 名程を対象に生活困窮のリスクが高い中高年男性の援助要請を促すために機関が果たすべき役割と機能・効果的な支援法等についてヒアリングを行った。会話データは逐語化し、その上で質的帰納的に分析した。会話データの整理には、MAXQDA2020 ソフトウェアを用いた。その結果、生活困窮のリスクが高い単身中高年男性がいつでも気軽に相談ができる場所や機会を提供することが重要であり、その上で支援者と被支援者間に信頼関係を構築することが援助要請を促すことにつながることが示された。援助要請の具体的な支援方法に関しては、心理学領域における知見(メタ認知や動機づけ)を相談現場に活用することの有用性が示された。さらに、生活困窮状態にある中高年者の援助要請を促すには、社会全体で社会的スティグマ(生活困窮者に対する偏見や差別)を解消する姿勢が重要であり、教育やメディアにおける正しい情報発信を促すことの必要性が指摘された。単身中高年男性の援助要請が阻害される要因は心理的、社会的要因が複合的に関与しており、さらに新型コロナウイルス感染症の流行の影響を考慮しなければならない。それゆえ、多職種・多領域との連携により様々な視点から検討することが必要不可欠であることが再確認された。

研究成果の広報・支援方法の提案

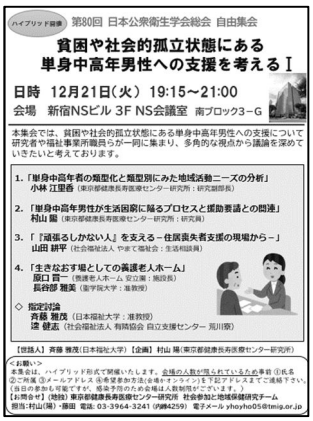
本研究により提案された単身中高年男性の援助支援を促すための具体的な支援方法について、学会での研究報告や自主シンポジウムでの報告を積極的に行い、新聞や情報誌への掲載などにより一般にも広く提言している。

・2021 年 6 月：江東社会福祉士会 2021 年度 第 19 回 定期総会講演に発表者として参加し、本研究の成果を実践家および一般の方に情報共有を行った(タイトル：生活困窮状態にある単身中高年男性が、助けを求めないのはなぜか？)。

・2021 年 6 月：都内 養護老人ホーム　2021 年度研修会に講師として参加し、本研究の成果を実践家および一般の方に情報共有を行った(タイトル：生活困窮状況にある単身中高年男性のライフコース)。

・第 16 回高齢者福祉実践・研究大会「アクティブ福祉 in 東京'21」に発表者として参加し、本研究の成果を実践家および一般の方に情報共有を行った(タイトル：養護老人ホームにおける入所者のライフコースと職員に対する思いの理解に基づく研修会の取り組み)

・2021 年 12 月：第 80 回日本公衆衛生学会総会 自由集会「貧困や社会的孤立状態にある単身中高年男性への支援を考えるⅠ」を企画・実施し、本研究の成果を実践家および研究者と情報共有し、今後の支援のあり方や社会実装について検討をした。


ハイブリッド開催　第80回 日本公衆衛生学会総会 自由集会

貧困や社会的孤立状態にある
単身中高年男性への支援を考えるⅠ

日時　12月21日（火）19:15～21:00
会場　新宿NSビル 3F NS会議室　南ブロック3−G

本集会では、貧困や社会的孤立状態にある単身中高年男性への支援について研究者や福祉事業所職員らが一同に集まり、多角的な視点から議論を深めていきたいと考えております。

1.「単身中高年者の類型化と類型別にみた地域活動ニーズの分析」
小林 江里香（東京都健康長寿医療センター研究所：研究副部長）

2.「単身中高年男性が生活困窮に陥るプロセスと援助要請との問題」
村山 陽（東京都健康長寿医療センター研究所：研究員）

3.「『頑張るしかない人』を支える－住居喪失者支援の現場から－」
山田 耕平（社会福祉法人 やまて福祉会：生活相談員）

4.「生きなおす場としての養護老人ホーム」
原口 育一（養護老人ホーム 安立園：施設長）
長谷部 雅美（医学院大学：准教授）

◇ 指定討論
斉藤 雅茂（日本福祉大学：准教授）
塗 健志（社会福祉法人 有隣協会 自立支援センター 荒川寮）

【世話人】斉藤 雅茂(日本福祉大学)【企画】村山 陽(東京都健康長寿医療センター研究所)

＜お願い＞
本集会は、ハイブリッド形式で開催いたします。会場の人数が限られているため事前（①氏名②ご所属③メールアドレス④希望参加方法(会場かオンライン)を下記アドレスまでご連絡ください。（当日の参加も可能ですが、感染予防のため会場は人数制限がございます。）
【お問合せ】(地独) 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム
担当：村山(陽)・藤田 電話: 03-3964-3241 (内線4259) 電子メール yhoyho05@tmig.or.jp

・2022 年 2 月：ボランタリーフォーラム TOKYO2022「『2025 年問題』高齢者男性を置き去りにしてはならない」に話題提供者として参加し、本研究の成果を現場職員および一般の方に情報共有をし、今後の支援の展開や課題について検討をした。

・本研究の成果を一般の方向けにまとめたものを、「東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム：日常生活における支え合いに関する調査報告書, 2022 年 3 月（執筆者：村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香）」として発行し、調査協力者等に郵送配布を行った。

・メディア報道：
「不信強まり、援助求めず：単身中高年者の心理を分析」東京新聞 2022 年 1 月 26 日掲載
「経済状況が苦しいほど不信強まり援助求めず：単身中高年者の心理を分析」 福島民報 2022 年 1 月 24 日掲載
「困窮する単身中高年調査・東京：他者への不信強まり孤立」河北新報 2022 年 1 月 14 日掲載
「ひとり暮らし 健やかに 」朝日新聞 2020 年 3 月 4 日 掲載

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Murayama Yoh、Yamazaki Sachiko、Hasebe Masami、Takahashi Tomoya、Kobayashi Erika	４．巻 63
２．論文標題 How Single Older Men Reach Poverty and Its Relationship with Help‐Seeking Preferences ¹	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese Psychological Research	６．最初と最後の頁 406～420
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12329	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村山陽,山崎幸子,長谷部雅美,高橋知也,山口淳，小林江里香	４．巻 10
２．論文標題 中高年単身者における電子メールやSocial Networking Service (SNS)を介した多世代関係と孤立感との関連	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本世代間交流学会誌	６．最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村山陽,山崎幸子,長谷部雅美,高橋知也,小林江里香	４．巻 43
２．論文標題 単身男性中高年者における将来展望を抑制する意識の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 老年社会科学	６．最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村山陽，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香	４．巻 9
２．論文標題 首都圏に居住する単身世帯の中高年者における近隣との世代間交流の必要性の認識　：同居世帯の中高年者との比較から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本世代間交流学会誌	６．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Murayama Yoh、Hasebe Masami、Nishi Mariko、Fujiwara Yoshinori	4．巻 21
2．論文標題 The impact of mutual aid on mental health and perceived isolation among the single elderly: An examination of economic status	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6．最初と最後の頁 555～560
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.14181	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Murayama Yoh、Hasebe Masami、Nishi Mariko、Matsunaga Hiroko、Narita Miki、Nemoto Yuta、Fujiwara Yoshinori	4．巻 99
2．論文標題 The effects of reciprocal support on mental health among intergenerational non-relatives?A comparison by age group	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Archives of Gerontology and Geriatrics	6．最初と最後の頁 104601～104601
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.archger.2021.104601	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Murayama Yoh、Yamaguchi Jun、Yasunaga Masashi、Kuraoka Masataka、Fujiwara Yoshinori	4．巻 Online first
2．論文標題 Effects of Participating in Intergenerational Programs on the Development of High School Students’ Self-Efficacy	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Intergenerational Relationships	6．最初と最後の頁 1～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15350770.2021.1952133	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村山陽	4．巻 8月号
2．論文標題 Geriatric Medicine（老年医学）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域共生社会に向けた孤立・孤独対策	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 村山陽，山崎幸子,長谷部雅美,高橋知也,山口淳,小林江里香
2．発表標題 単身中高年者の経済的困難な状況における援助要請を抑制する要因の検討：性差と主観的経済状態に着目して
3．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 長谷部雅美,村山陽,山崎幸子,高橋知也,小林江里香
2．発表標題 単身中高年者における介護サービスの認知度：日常生活での困り事を相談する相手の有無とその関係による比較討
3．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 山口淳，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
2．発表標題 中高年層ユーザーが電子メールやSNSを介した友人関係に期待すること性別・年代別・世帯類型別の検討
3．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 山崎幸子，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，山口淳，小林江里香
2．発表標題 単身中高年者の孤立感に対する対処法の構成要素：自由記述による質的検討
3．学会等名 日本老年社会科学会第63回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 村山陽,山崎幸子,長谷部雅美，高橋知也，山口淳，小林江里香
２．発表標題 経済的困難を抱える単身中高年男性の援助要請はどのように抑制されるのか:将来展望意識に着目して
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋知也,村山陽,山崎幸子,長谷部雅美,山口淳,小林江里香
２．発表標題 周囲からの孤立を感じやすい中高齢者の特徴
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 原口晋一，村山陽
２．発表標題 養護老人ホームにおける入所者のライフコースと職員に対する思いの理解に基づく研修会の取り組み：研究機関との連携の試み
３．学会等名 第16回高齢者福祉実践・研究大会「アクティブ福祉in東京'21」
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山陽，長谷部雅美，山崎幸子，山口淳，小林江里香
２．発表標題 コロナ禍における生活困窮者自立支援事業の相談員の職務ストレスの実態とその関連要因
３．学会等名 日本健康心理学会第34回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，山口淳，小林江里香
２．発表標題 単身男性中高年者における経済状況と思考抑制傾向が精神的健康に及ぼす影響
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山崎幸子，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，山口淳，小林江里香
２．発表標題 単身中高年者における馴染みの場の分類と関連要因
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長谷部雅美，村山陽，山崎幸子，高橋知也，山口淳，小林江里香
２．発表標題 単身中高年者における生活支援サービス利用への抵抗感に関する検討
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林江里香
２．発表標題 単身中高年者の類型化と類型別にみた地域活動ニーズの分析
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会 自由集会「貧困や社会的孤立状態にある単身中高年男性への支援を考えるⅠ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山陽
２．発表標題 単身中高年男性が生活困窮に陥るプロセスと援助要請との関連
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会 自由集会「貧困や社会的孤立状態にある単身中高年男性への支援を考えるＩ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 原口晋一，長谷部雅美
２．発表標題 生きなおす場としての養護老人ホーム
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会 自由集会「貧困や社会的孤立状態にある単身中高年男性への支援を考えるＩ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 村山陽
２．発表標題 地域共生社会に向けた世代間交流の互恵的効果:社会心理学の視点から
３．学会等名 日本世代間交流学会 第12回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林江里香，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，山口淳，山崎幸子
２．発表標題 単身中高年者における心身の健康・社会関係・経済状態による類型化と類型別特徴
３．学会等名 日本社会関係学会第2回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身男性高齢者の孤立と貧困に至るプロセスと援助要請の検討：ライフコースの視点から
３．学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 生活困窮状態にある単身男性高齢者における被援助志向性の特徴
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山崎幸子，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身高齢者の孤独に関する表現の性差
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽
２．発表標題 ICT利用を通した多世代コミュニケーションが中高年者の孤立感に及ぼす影響
３．学会等名 日本世代間交流学会第11回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小林江里香，村山陽，山崎幸子，高橋知也
２．発表標題 都市部の中高年者における近所づきあいとその契機－性別、居住形態、婚姻状況別特徴
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身男性中高年者における将来の生活に対する意識の特性
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋知也，村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，小林江里香
２．発表標題 「周囲からの主観的な孤立感尺度」の作成と主観的健康感との関連の検討
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身男性高齢者の孤立と貧困に至るプロセスと援助要請の検討： ライフコースの視点から
３．学会等名 日本老年社会科学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 生活困窮状態にある単身男性高齢者における被援助志向性の特徴
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山崎幸子，村山陽，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身高齢者の孤独に関する表現の性差
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋知也，村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，小林江里香
２．発表標題 「周囲からの主観的な孤立感尺度」の作成と主観的健康感との関連の検討
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村山陽，山崎幸子，長谷部雅美，高橋知也，小林江里香
２．発表標題 単身男性中高年者における将来の生活に対する意識の特性
３．学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山崎　幸子 (Yamazaki Sachiko) (10550840)	文京学院大学・人間学部・教授 (32413)	
研究分担者	長谷部　雅美 (Hasebe Masami) (70773505)	聖学院大学・心理福祉学部・准教授 (32412)	
研究分担者	高橋　知也 (Takahashi Tomoya) (90813098)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 (82674)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関